

出席：小佐野・山中・石川・小西・三角・松村・高橋・内野・中垣・加藤・森・大野・
神野・池田・堀之内

1．異動等による役員の補充と紹介

柏木・渡辺・山本・友村・鈴木・角田・中嶋の各氏の異動等による役員失格・辞退と、小佐野・三角・松村・中垣・江口・大野・池田の各氏の役員補充が報告され、新任役員の紹介があった（総会資料 1 参照）。

2．2005 年度研究グループ助成金、及び 2005 年度関西支部調査奨励金

ともに、申請は無い旨の報告があった。

3．総会資料の検討

2004 年度事業報告・2005 年度事業計画を検討した（総会資料 2・3 参照）。

最近の例会年会で発表プログラム件数が増えていることが話題となり、大変好ましいとのコメントがあった。

研究グループ助成金と度関西支部調査奨励金の申請が無かったことで、来年度へ繰越し募集の予定を確認した。また、関西支部調査奨励金授与規定の改定を決定した。改定の主旨は、授与対象者を優れた調査研究を行っている者、及び教育の分野で優れた気象教育を行っている者とし、受領に対する義務は負わない、との変更である。

2005 年度事業計画は、常任理事会・理事会・総会・年会の実施、3 回の地区例会と講演会、第 27 回夏季大学、2005 年度秋季大会それぞれの実施と、3 回の支部ニュースと年会例会の要旨集の発行とする。

関西支部ニュースの発行については、経費節約のため来年度から郵送での通知を取りやめ、HP での掲載を告知するメール配信へと移行させる。今年度は、移行期間として郵送と支部ニュースのメール告知 2 本立てで行う。

2004 年度決算と 2005 年度予算案を検討した（総会資料 3 参照）。

地区例会において、昨年度は特別講演者への連絡体制が不明確となって、特別講演者に負担をかけたことが報告された。依頼は、主催（＝地区理事）が文書形式で詳細を詰めて依頼し、要旨集作成に関しては関西支部事務局が受け持つということで所掌を確認した。

総会は、委任状を含めて過半数を超え、成立となる。ただし、委任状の収集にかなり苦労した。支部会員の議決権による種別化が必要になっている。本部では既に種別化されており、支部での種別化は他支部においても悩まされているであろう共通問題であり、今後の検討課題となった。

< 気象学会関西支部第 26 期第 2 回総会 >

松村理事の司会で総会が始まる。年会の発表件数が多く年會に時間をさいたため、総会は短時間になるとの説明があった。

参加者と委任状をあわせて 284 名で、全支部会員数 549 の過半数となっており、大会は成立すると池田幹事からの報告があった。

小佐野支部長が、気象学会の研究と活動の結果が一つの成果となって予報精度の向上の形にあらわれている、との主旨の挨拶があった。

大沢会員を議長に選出し議事を進めた。

用意された、2004 年度事業報告・決算、2005 年度事業計画・予算について、その他の議事について承認された。

質疑事項の要点は以下である。

予算案の研究グループ費について、調査等の奨励をうたっているが削減は問題が無いかとの質問があった。経費削減とのからみもあるので検討する。

小中学校での学習指導要領の中で気象分野が縮小になったなかで、発展的指導内容として気象が扱えるようになった。しかし、一部では疑問符がつくような内容がありで、その内容は学会で注視していく必要があるとの意見があった。

支部会員数の漸減が問題である。气象台等での年齢構成上避けがたいところはあるが、若年層の勧誘が必要であるとの意見と叱咤があった。

過去、夏季大学の案内は教育委員会から現場の教師への紹介もあった。そういった広報も必要で、気象学会の裾野拡大に必要であるとの意見があった。

中山理事から、過去秋季大会での寄付金収集での支部経費補てんの経緯と今年度秋季大会での寄付金収集の原則停止による今後の支部財政逼迫の説明と、会員増加の方策検討、奨励金の運用についての説明があり、質疑に対する答えとした。

< 気象学会関西支部第 26 期第 2 回年会 >

総会ではかなりの空席に対し、年会での空席はまばらになるなど期待の大きさが伺われた。

発表件数は 13 件で、例年より件数が多く、時間は制限されるものとなった。

座長は、前半を石川理事、後半を山中理事としてそれぞれの発表と質疑が行われた。今回は、観測・予報・測器などの分野と幅広く、また教育・啓蒙・音楽関連など過去にあまり見られなかった分野での発表もあった。各発表について、熱心な質疑がそれぞれ時間いっぱいに行われた。

< 蛇足:レセプション >

学生とおぼしき年代から大先輩まで 30 人を超す人数で、レセプションが盛況に行われた。

年会での教育・啓蒙や音楽などこれまで見られなかった発表は、興味深かったとのもっぱらの評判であった。